

研究の始まりと展開は、運命的なもの？

関西大学 名誉教授

高木 修 (たかぎ おさむ)

私の半世紀に亘る研究人生の出発点は学部・大学院共通の社会心理学の講義にあった。教授は、受講生の希望を聞くことなく、クレチ他による *INDIVIDUAL IN SOCIETY* の第2部「社会的態度」を担当し、全員に説明するよう私に命じた。第2部は、態度の性質と測定、態度形成、態度変容の3章から成っていた。深く読み込むほどに益々興味が湧いてきた。生涯の根幹的な研究テーマ「態度変容と行動変化」はここに端を發し、以後多くの研究をまとめて京都大学に提出した博士論文の題目も「態度構造及び態度と行動の関係」となった。

研究テーマを現実の社会問題で展開する場が偶然に訪れた。関西大学に赴任して間もなく、附設研究所が研究員を募集した。研究班の課題は「環境（公害）問題」であり、「水質汚染」を担当した。当時、赤潮が湖沼や海を襲っていた。大きな原因は洗濯用の合成洗剤である。この事実を主婦はよく分かっているながら石けんに切り替えようとしない。正しく態度と行動の問題である。環境社会心理学研究の趨りとなった。

教授は、ジンバルドとイブセンによる *influencing attitudes and changing behavior* の翻訳の機会を与えてくれた。これがスタンフォード大学留学の契機となった。ジンバルド教授と最新の研究課題について話し合った。"helping behavior"だと彼は言った。困っている人がいたら助けるべきだが、人はなかなか助けられない。これも態度と行動の問題だ。援助行動に関する論文や専門書を多数持ち帰った。日本での研究の先陣を切った。これが私の主研究領域となった。

臓器提供も援助行動の一つである。調査結果の報告を聴いた腎臓病を患う流通関係者が研究室にやってきた。消費者の購買意思決定過程が知りたいと言った。スーパーの購買現場で行動観察と出口調査を行った。実に非合理的で情動的な購買決定に驚いた。経済心理学への一つの道筋が見えた。

被服構成学を専門にする家政学の研究者が研究室にやってきた。消費者が何を考えて被服を購入、着装、保管、廃棄するかが知りたいと言った。心理学からのアプローチが必要だと応えた。購買意思決定過程研究の知見を援用して研究協力した。被服社会心理学という新領域を開拓した。

これ以上記さないが、振り返れば、研究への根幹的な関心を堅持しながらその発展と社会的貢献の可能性に果敢に挑戦してきた。研究者には運命的な出会いや機会が必ず訪れる。真摯に現実の問題に向き合うべきだ。



Profile—高木 修

1970年、京都大学大学院文学研究科心理学専攻博士課程単位取得退学。京都大学文学博士。関西大学社会学部助手、専任講師、助教授、教授を経て2009年退職、名誉教授。専門は、社会心理学、対人社会心理学。著書には日本心理学会監修の心理学叢書1巻『思いやりはどこから来るの？：利他性の心理と行動』（共編、誠信書房）と3巻『無縁社会のゆくえ：人々の絆はなぜなくなるの？』（共編、誠信書房）がある。その他は<http://www2.kandai-koyukai.com/al/sensyuukai/>を参照されたい。